

## 【エッセイ】

### 父親の役割 母親の役割

前川 美和

文芸思潮 エッセイ賞 応募

最近「育メン」という言葉をよく耳にする。男性が出産や育児に深くかかわろうとする言葉だ。出産前は、妻と一緒に母親教室に通い、出産後は、ミルクをあげたり、オムツを替えたりと母親のすることなら何でも手伝う。参観日や行事には有休をとって参加し、恵まれた職場に限られるだろうが、堂々と「育休」をとる男まで出現している。生活に余裕が出来て、子供の数が少ないことも背景にあるようだ。

夫婦で協力し合って、育児に取り組む姿は望ましいことであるが、男性が自分の仕事を犠牲にしてまで育児に関わることを殊更持ち上げる今の風潮に対しては、違和感を覚える。男性が仕事を通じて社会的な貢献をするというふうには、外に向けてエネルギーを費やすというよりも、家庭という個人レベルを重視し内へのエネルギーの投入を優先することを奨励するのはいかがなものか。また様々な結婚の形態はあるが、子を成し家庭を築こうとする場合は男女に性差がある以上、子育てへの関り方にも男女の特性を生かしたスタイルがあるはずだ。私たち人間も地球という星に生息する種の一つで、根は様々な生き物たちと共通しているという観点から、人が属する哺乳類がどのように次世代を育んでいるのか振り返りながら、子育てにおける男女の役割について再考したい。

哺乳類におけるオスとメスの子育てへの関与の仕方をみてみる。オスは交尾後全く子育てに関わらないことが多いが、メスや子どもにエサを供給するために狩りをしたり、外敵から守ってやることで子育てに協力する場合もある。いずれにしても、子を産んだメスは当然自分の乳を与え、一人前になるまで子どもをそばに置き、エサの取り方や天敵への対処の仕方など生き延びるための術を教え込む。そして、一定の子育て期間が過ぎれば、容赦なく子どもを放り出す。その後子どもは各々自分の力でエサを取りナワバリや伴侶を探すことを余儀なくされる。

人も他の哺乳類と同様、女性は卵子を造り出し、子宮で受精卵を育み、その命を世に送り出し、新生児にとって唯一の食である母乳を与える。人の子は人の乳で育てられるのが理に適っているのだ。母親は授乳中は乳を欲しがると子にいつでも乳をあげられるように、子供に一番近いところで子育てに直接関わりつつ、仕事から帰ってくる父親を温かく迎える。

男性はひたすら精子を提供しつづけ、それを提供する準備をしながら、外で働き、妻子が平和で穏やかな生活を安心して送れるような環境を整える。このように外側から大きくサポートするという形が子宮や乳房を持たない父親の取るべき姿のような気がする。この性差による役割分担を把握することも遂行することもできない幼稚な人間が増えてきたと感じるのはわたしだけだろうか。

第一に、母親が子育てにすぐ音を上げる。赤ちゃんはよく泣くものだ。お腹が空いたと

言つては泣き、眠いと言つては泣き、ウンチをしたと言つては泣く。泣くことが唯一のコミュニケーション手段なのだから仕方がない。昼夜逆転することも多々あり、夜中に一、二時間ごとにぐずられると、母親は慢性的睡眠不足になる。ウンチが毎日出なかつたり、体重が順調に増えないと、母乳が足りてないかと不安になるし、せつかく作った離乳食を食べてくれなかつたり、ハイハイがなかなかできなかつたりすると心配になる。母乳をあげていても風邪はしょっちゅう引く。夫が朝家を出て、夜帰ってくるまで、誰とも話さない日が続き、社会の片隅に一人取り残されてしまったようで、孤独感に苛まれストレスが溜まりクタクタになる。しかしそれが「子育て」なのだ。

仕事を持つために、子どもの世話を誰かに頼っている母親がよく「子育て子どもと一緒にいる時間の長さではなくて、その濃さ、質だ」とうそぶくが、「濃さって何？」と逆に聞きたいものだ。一日の中で子どもと向き合える時間が一、二時間あつたところで一体何ができるのだろう。わたしは子育てには子どもと関われる時間の長さ、つまり、量が重要だと思う。絶対的に信頼できるお母さんがいつもそばにいてくれる信頼感が必要なのだ。ずっと遊んでやらなくてもいい、家でゴロゴロしていてもいいし、テレビを見ていてもいい。一緒に時を過ごすうちに核となる親との安定した関係が育まれ、次第に外に出ていくつ力が培われるのだ。赤ちゃんは昨日できなかったことが今日突然できるということを繰り返す。その初めて何か出るといふ瞬間に立ち会えるのは、四六時中一緒にいる母親の特権である。

子どもを産むことを選択したのなら、その選択に対して責任を持たなければならぬ。マタニティブルーを何とか乗り切るため、ストレスを発散させる方法を自分で探さなければならぬ。母親たるものそれくらいの強さや知恵は持っているほしい。そして、子どもを産んだら、覚悟を決めて、子どもが生理的に母親を必要とする一定期間育児に専念してはどうだろう。子どもは見る見るうちに大きくなり、親の手を離れていく。少し待てば働くチャンスは必ずやって来る。働くスタイルも従来になかつた様々な形が提案されている。

一方、父親も父親で、父として夫として社会の一員としてしっかり立っていない。母乳が出ているうちにミルクをあげたがったり、オムツ替えから寝かしつけるまで、こまごまとした子育て全般に関わりたがる。むしろ母親になりたがる輩もいる。もちろん母親である妻の負担を減らしてやろうという気持ちならありがたいが、母親は一人もいらぬのだ。そういったこまごました世話よりも、父親、夫にしかできないサポートを考えてほしい。まず赤ちゃんではなく、妻へのいたわりや愛情をしっかりと表すべきだと思う。従順で保護を必要とする赤ちゃんに目が行きがちで、妻の孤独やストレスに無関心な幼い夫が案外存在しているような気がする。それに経済的なサポートは不可欠だ。妻が幼い子を誰かに預け共働きに出ないでゆつたりと家で育児ができるように、しっかりと稼いで来いということだ。

また、外で働くという行為は家族を支えるばかりでなく、社会に貢献するという意味を持つ。男は社会を担うべき存在であることを自覚してほしい。職場で与えられた仕事をこなし、給与を得て妻子を養うと同時に、自分の仕事に誇りを持ち、効果的な技術管理やシステム改善、新しい切り口での取り組みなどにやりがいを見出していく積極性が望まれる。

自分の会社、ひいては社会を動かしてやろうという気概のある男が減ってきているように感じる。男の匂いのしない、汗さえかかないようなしれっとした若い男が量産されているのではないだろうか。

このように見てくると、人間は男も女も本能を失いつつあると言わざるを得ない。それが性交渉や子育てを不完全なものにしているように思える。動物は本能に忠実だ。己の子孫を残すため、オスはメスを求めて戦い、強くて頭のいいオスだけが自分のDNAを残すことができる。メスは自分の産んだ子を命懸けで守る、敵わぬ相手に立ち向かうことさえいとわない。そして時が来たら、きっぱりと子別れする。それは見事な潔さだ。人間はどうだろう。性衝動がなく性交渉を拒む男と女、社会における生産的な仕事に興味を持たず、母親になりたがる男たち。自分の子をなぐり、叩き、投げつけ、踏みつけて殺す親たち。三十、四十になっても親離れできない子どもたちとそんな子を囲う親たちとの不健全な血族関係。本能をなくしつつある人間は、それと引き換えに一体何を得よとしているのだろうか。

〈了〉